The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	自閉症スペクトラム障害のある成人におけるコロケーション誤用生起と認容性についての研究
Author(s)	福田, 純子
Citation	大阪大学, 2022, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/91775
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　福田　純子　）	
論文題名	自閉症スペクトラム障害のある成人におけるコロケーション誤用生起と認容性についての研究

論文内容の要旨

〔目的〕

筆者は,就学前の自閉症スペクトラム障害児(ASD児)の臨床で,風船が割れる描写場面に対し「風船が壊れる」と発言したASD児に,そこに居合わせたASD児らがそれに同調するという場面に遭遇した.私たちは日常的に「風船」には「割れる」という共起表現を用いて発言しているため違和感を覚えた.このような「2つ以上の単語の慣習的なつながり」の共起関係は,大辞泉（1998）ではコロケーションと定義されている.コロケーションの誤用については先行研究よりASDでは幼児期から青年期にかけて消退せず,むしろ拡大する様子が示唆される.コロケーション誤用に関する研究の対象者は,外国語学習者が多く,ASDについては,子どもについての研究が1つあるだけで成人については研究がない.本研究では,第1に①成人ASD者においてコロケーションの誤用が広範に確認できるか.②ASD者のコロケーションの誤用と外国語学習者のコロケーションの誤用にどのような異同がみられるかについて検討する.第2に臨床場面でASD児が他のASD児が発言した誤った共起表現に同調する場面に遭遇していていることから,自閉症成人間でも同調が生じうると考えられ,ASD成人のコロケーション誤用に対するASD成人と定型発達者（TD者）の認容性を比較し,コロケーション誤用をめぐるASD成人間の独自の同調ないし共感が生じているのかを明らかにする.

〔方法ならびに成績〕

18歳以上でASDと診断された12名と対照群12名（男性5名，女性5名）が,一定の条件を満たした会話相手と30分間にわたって行った会話を分析した.結果,コロケーションの誤用はASD群12名の内11名から計25個抽出された(例えば「家庭が倒れる」など).対照群ではコロケーションの誤用は認められなかった.次にコロケーションの誤用と正用の類似性を調べるため,推定される正用表現を求めた.抽出された25個のコロケーションの誤用と,各々の誤用に対する正用を,『分類語彙表増補改訂版』(国立国語研究所,2004)を用い,分類情報である番号をわりあて類似度を調べた結果,ASD群では外国語学習者に比べ類似性が低い誤りが多く生じていた.また重複,造語,過剰,省略表現は外国語学習者には見られなかった.第2の研究では,得られた25個のコロケーション誤用とTD者の会話サンプルから25個のコロケーションの正用を抽出した表現を用い,18歳以上でIQを統制したASD群20名とTD群20名を対象に,それぞれ5件法を用い,表現の適切性についての評定を求めた.その結果,ASD群はTD群よりも誤用の評定値が有意に高かった.またASD群は正用評定値が誤用評定値より有意に高く,TD群でも正用評定値は誤用評定値より有意に高かった.年齢に関しては,両群間で有意差が認められたため,ASD群とTD群の評定平均値と年齢について検定を行ったところ,ASD群の誤用平均値と負の相関が認められた.しかしTD群ではこの相関は認められなかった.

〔総括〕

第1の研究結果として,成人に至ってもASD群にコロケーションの誤用を認め,対照群では確認されなかったことより,コロケーションの誤用はASD者の言語症状である可能性がある.なお,誤用が抽出されなかった１名は発話量が最も少なかったことから,誤用には発話量も関係していると思われた.また外国語学習者のコロケーション誤用に比べ,ASD者のコロケーション誤用は正用表現との類似性の低い誤用が多い可能性が示唆された.外国語学習者のコロケーション誤用の原因は語彙知識の量や質の問題が影響していると考えられるが,ASD者のそれは視覚情報への依存や共起語の意味カテゴリー無視と関連すると考えられる.重複表現,造語表現,過剰表現,省略表現の4つの誤用がASD群のみに認められた点について,ASD者のコロケーションの誤用が生起するメカニズムと考えられる,発話量の多さ,視覚情報への依存や語の意味カテゴリーの無視といった文脈処理の特異性を外国語学習者は共有していない可能性がある.第2の研究でコロケーションの誤用の適切性評定について,ASD群はTD群に比べコロケーションの誤用を適切と判断したことから,ASD者がASD的行動様式に同調ないし共感する可能性がコロケーション誤用に対する認容性において示唆された.

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　福田　純子　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　教 授	片 山 泰 一
	副 査　教 授	土 屋 賢 治
	副 査　准教授	吉 村 優 子

論文審査の結果の要旨

本論文は、自閉スペクトラム症の成人にみられるコロケーション誤用生起と認容性について、独自の解析方法を用いて明らかにした論文であり、大変価値ある研究と考えられる。申請者は、ASD者のコロケーション誤用に関する先行研究は少なく、その中でも、幼児期から青年期、成人期と成長とともに消退せずむしろ拡大する様子が示唆されること、コロケーション誤用の研究対象者は大半が外国語学習者でASD者のコロケーション誤用に注目した研究はみあたらないことから、本研究に着手した。

本研究では、第1に成人ASD者においてコロケーションの誤用が広範に確認できるのか、ASD者のコロケーションの誤用と外国語学習者のコロケーションの誤用の異同について検討した。さらにASD児が犯したコロケーション誤用に、そこに居合わせた他のASD児が同調したことから、第2にASD成人のコロケーション誤用に対するASD成人と定型発達者（TD者）の認容性を比較し、コロケーション誤用をめぐるASD成人間の独自の同調ないし共感が生じているのか検討を行った。

対象者は18歳以上でASDと診断を受けた群12名と対照群12名が、一定の条件を満たした会話相手と30分間にわたる会話を分析した結果、コロケーションの誤用はASD群11名から計25個抽出されたが、対照群では認められなかった。次にコロケーションの誤用と正用の類似性を調べるため推定される正用表現を求めた。25個のコロケーションの誤用それに対する正用を、『分類語彙表増補改訂版』(国立国語研究所,2004)を用い類似度を調べた結果、ASD群では外国語学習者に比べ類似性が低い誤りが多く生じ、また重複,造語,過剰,省略表現は外国語学習者には見られなかった。第2の研究では得られた25個のコロケーション誤用とTD者の会話サンプルから25個のコロケーションの正用を抽出した表現を用い、18歳以上でIQを統制したASD群20名とTD群20名を対象に、それぞれ5件法を用い表現の適切性について評定してもらった。結果、両群間では誤用は有意差が認められたが.正用では有意差はみられず、両群内では誤用と正用の間で有意差が認められた。またASD群は年齢と評定平均値の間で負の相関を認められた。

第1の研究結果より、成人に至ってもASD群にコロケーションの誤用を認め、対照群では確認されなかったことより、ASD者の言語症状のひとつの特徴と考えられた。さらにコロケーション誤用には発話量とも関連していることが示唆された。また、外国語学習者のコロケーション誤用に比べ、ASD者のコロケーション誤用は正用表現との類似性が低い誤用が多い可能性が示唆され、外国語学習者とは異なる誤り方と考えられた。誤り方を調べると外国語学習者のコロケーション誤用の原因は語彙知識の量や質の問題が影響しているが、ASD者の誤りは視覚情報に依存しやすいことや共起する語の意味カテゴリーを無視しやすい特徴があった。また外国語学習者の誤用分類には見られない重複表現、造語表現、過剰表現、省略表現はASD群のみに認められた点から、ASD者のコロケーション誤用が生起するメカニズムである発話量の多さ、視覚情報への依存や語の意味カテゴリーを無視するといった文脈処理の特異性を共有していない可能性があり、ASD者における特異な言語表現である可能性については今後の検証が必要と考える。今回の結果から、ASD児の言語習得の過程で語に内在する情報をも含めた支援へつながる知見が得られることが期待できる。第2の研究である適切性評定について、ASD群とTD群間で誤用に有意差が生じたことはASD群が犯したコロケーション誤用をASD群はTD群に比べ適切と判断したと考えられ、ASD者がASD的行動様式に同調する可能性が示唆され、自分に似た特性をもつ者に同調しやすい可能性がありグループなどの介入への知見が期待される。また、ASD群のみコロケーション誤用の評定平均値と年齢の間で負の相関が認められたことより、ASD群は年齢が高いと誤用を不適切と判断する度合いが高いことが示唆されたことから、成長とともに社会的ルールを身につけていく過程が予測できる。このように、本研究は、自閉スペクトラム症の成人にみられるコロケーション誤用生起と認容性を明らかにし、ASD者への適切な支援に応用できる結果を導き出した成果は博士（小児発達学）の学位授与に値する。